

日本を代表し現地で活動する方々に、感謝します！

川辺 絵梨（東京都 会社員）

●はじめに

海外を旅行した際、思わぬところで日の丸を見かけることがある。時にそこには、From the People of Japan（日本の国民から）と併記されている。日本の国民？ 私にもそれに含まれている！？ 私は少しうれしくなる。なぜなら、途上国の現状を見聞きする度、いつも何か出来ることはないかと考えるが、自分に出来ることを見出せずにいる。そんな私も、日本の国民として国際協力が出来ていると感じられるからだ。

しかし、日本はどのような国際協力を行っているのか？ 日本の国民として誇れるものなのか？ 日本の国民を代表して活動されているのはどのような方々なのか？ 詳しい実態をほとんど知らなかった。

また、ODAと聞いてイメージするのは、道路・橋・港湾・空港といった大規模なインフラ整備であった。しかし、青年海外協力隊などの市民参加協力もODAの一つの形態であることを知り、どのような形態のODAを視察出来るのかと楽しみになった。

そんな国際協力に直接関わることのない一般国民の一人として、東ティモールで日本のODAの現場を視察してきた。

●視察する中で見えてきた東ティモール

全体の印象

独立して12年、独立後も暴動のニュースが流れるなど、治安に不安を感じる情報しか持ち合わせていなかった。これは私だけのことではなく、一般的に“治安が悪い”というイメージしかないようだ。私の東ティモール派遣を知ると皆口々に、「治安は大丈夫なの？」と案じてくれた。しかしこのプログラムの全行程において、危険を感じることは一度もなかった。ぎゅっと詰まったスケジュールをこなしつつも、終始穏やかな空気に包まれ、ゆったりとした時間の流れを感じる事が出来た。しかし視察先を訪問するにつれ、言語や教育の問題、未発達な国内産業、高い失業率など、多くの課題が残されていることが分かり、現在の治安は盤石なものではないことが想像出来た。この現状を考えると、今後も選挙の前後などには不穏な空気が流れることが懸念される。

治安だけでなく街並みも、想像とは違っていた。途上国特有の混沌とした街並みを想像していたが、混沌とした印象はなく、アジアの他の途上国とは一味違い、比較的落ち着いた印象であった。

世界的に見ても高い出生率の若々しい国とあって、街にはたくさんの子供の姿があった。朝夕に限らず日中は、制服を着た登下校中の子供たちを常に見かける。これには理由があった。子供の数に比べ、圧倒的に学校や教員の数が足りないのだ。そのため学校が2部制となっていることが多く、地方では3部制もあるようだ。2部制3部制では1日の授業時間が少なくなり、十分な教育の場を確保出来ていない状況である。

子供たちも含め東ティモールの人々は、シャイな人が多いように感じた。カメラを向けて嫌な顔をする人はいないのだが、はにかむ表情を見せる。日本人の気質と共通する部分があるようだ。

言語・教育の問題

教育を受けた時代や環境により、得意な言語が異なる。現在の公用語はポルトガル語とテトゥン語、実用語としてインドネシア語が使われている。また大学の専門的な分野では英語が用いられ、さらに地方には少数言語も存在する。今回視察した現場でも、教科書やマニュアルが活用されにくい状況が見受けられた。



協力の証（ラハネ浄水場）



ゆったりとした時間の流れるビーチ

言語の問題や紛争が、過去も現在も教育の質に大きな影響を及ぼしている。日本からの青年海外協力隊員や専門家は、専門的なことを伝える前に基礎学力のフォローが必要となっている。技術協力の現場で、算数を教えることがあるという現状を伺った。

モチベーションの問題

「意欲がないのではなく、動機付けが難しいのだ」とテクノロジー・工業技術専門学校で活動されている塩田隊員がお話してくださった。何のために学ぶのか、その知識で何が出来るのか、未来を想像する環境が整っていないようだ。その要因は、まず歴史的背景により視座が短絡的で長期的な観点を持ちづらいこと。また、国内産業が未発達で職種が少ないことや失業率が高いこと。さらに、情報の不足により見える世界が狭いことが挙げられる。

このような状況を改善するのにぴったりな活動をされている青年海外協力隊員がいた。それは、国営ラジオテレビで活動されている門上隊員である。「狭い世界しか知らない子供たちに、いろいろな仕事を見てもらい、その素敵さを知ってほしい」との思いで、仕事の現場を紹介する子供番組を制作している。番組を拝見させて頂いたが、機材等が十分ではない状況の中、手間暇を掛けて工夫することにより素敵な子供番組となっていた。大人が見ても十分楽しめ、ためになる番組である。この番組をきっかけに、夢を抱く子供が増えることを期待する。



子供番組について熱く語る門上隊員
(国営ラジオテレビ)

●日本らしい国際協力の形

現地の状況に合わせ、同じ目線で一緒につくりあげていく。自発性や自助努力を重視し、支援が終わった後のことを考えながらの活動。物を供与するだけでなく、それを効果的に活用出来るよう運用や維持管理方法等の技術協力。きめ細かい日本らしい支援の現場を視察することが出来た。また、物がなくて諦めるのではなく工夫することの大切さや協同し経験を分かち合う素晴らしさを、日本人の姿勢として伝えていることが窺え、誇らしく思えた。

視察最終日に日本大使館にて山本大使を表敬し、「日本の支援は、目立たないけど、地道だけど、時間が掛かるけど、“一緒にやる”ところが強みだ」との説明を頂いた。まさに視察先で見てきた支援の形で、日本ならではの日本人らしさを発揮出来る支援の形だと思った。このような支援には忍耐が必要で、強い思いがないと出来ないことだと感じ、現地で活動されている方々の思いや苦労は、お金では計れない尊いものに思えた。

また、草の根技術協力の対象村コモロ村のエウリコ村長にお会いする機会を頂き、「これまでの日本の支援に感謝している。これからも連帯のスピリットを持って、長期的に協力していきましょう」とのお話を伺え、日本企業や日本人旅行者が海外で友好的に受け入れられることが多い背景には、日本を代表して海外で国際協力に携わる方々が築いた信頼関係があるのだと実感した。お忙しい中時間を割いてくださり、このようなお話をしてくださったのは、信頼関係が確立されている証であろう。現地で活動する日本人のお陰だと思う。

私も納税者という立場で日本の国際協力の一翼を担っているといえるのだが、自分の目で実際に現場を視察し、活動内容や活動されている方々を知れば知るほど、一翼を担っているだなんておこがましいと思えてきた。

●おわりに

日本は、資源・エネルギー・食料など多くを輸入に頼っている。また少子高齢化により、国内市場の縮小・労働力不足の問題が深刻化している。そんな日本のさらなる発展に、途上国の発展は欠かせない。

さらにグローバル化により進む相互依存の関係は、物や人材だけでなく、支援も同じなのだと思う。東日本大震災に対し、海外から多くの支援を頂いた。東ティモールからも温かい支援を頂いた。その結果、2011年は日本が世界一の被援助国となったのだ。困ったときはお互い様、国際協力もそうではないだろうか？

このように相互依存の関係を考えると、国際協力は相手国のためでもあり、自国のためでもあると理解出来る。また、日本の未来に対する投資と考えることも出来る。つまり、“途上国を支援することは、日本の未来を支援すること”ではないだろうか？



コモロ村エウリコ村長